

特集

複数言語環境で成長する子どもたちはどのように
言語と向き合い、生きようとしているのか

緒言

川上 郁雄

© 2024. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

本誌は、これまで複数言語環境において「子どもの「ことばの実践」を考える」(13号), 「子どものことば」を育むとは—親子の視点から」(14号)をテーマに特集を組んだ。今号の特集も、そのテーマの延長線上に位置づいている。

本特集の趣旨を改めて説明しておこう。

複数言語環境で成長する子どもは、幼少期より成長期、そして成人となっていく過程で家庭環境、親の教育方針、移動の経験、学校や社会的環境から様々な影響を受けつつ成長していく。その成長過程で、子どもは複数言語のうち、どの言語を使い、どの言語を使わないことも含め、どう生きるかと向き合い続けていく。例えば、親の教育方針により日本国内のインター校や海外の学校で学ぶ子ども、日本で生まれ親の言語を使えなくなったことを心配した親によって親の出身国へ送られる子ども、海外の複数言語環境で育ち、日本の大学の英語コースへ進学し、将来、日本語を含む複数言語を使用して誕生国での就職か日本での就職かを考える若者、海外で生まれ日本語補習授業校に通うが日本語を学ぶことをやめた後、大学で再度日本語を学ぼうとする若者など、多様な「移動の軌跡」を持つ子どもや若者が、国内外に多数いる。

これらの子どもや若者は、幼少期から人生全体において、家庭内で使用する言語、学校選び、進路・キャリアの選択、パートナーとの付き合い、結婚後の子育ての言語教育、老後の住まいと墓所まで、人生の節目において言語との関係は切り離せない。さらに、どの

言語と向き合うかには個人や家族の判断だけではなく、学校や企業、社会、メディアなどからの多様な力や言説が影響を与えていると考えられる。

複数言語環境で育った人の複数言語使用の実態については「言語管理理論」や「家庭内言語政策/方針」の研究領域で、「言語選択」の要因、「コード・スイッチング」の現象が分析されることがあったが、それらの研究では複数言語環境で成長する人の、複数言語に関わる、その時々戸惑い、葛藤、希望、期待、表現できない思いや、それらの中でどのように言語と向き合い、どのように生きようとしているのかという「当事者の営み」はほとんど焦点化されてこなかった。

これまでの研究で明らかのように、これらの人々の「ことばの力」は多様な言語資源が混ざり合った複数言語・複文化能力と捉えられるし、人々は日常生活においてもマルチ・リテラシーを発揮して多様なコミュニケーションを行いながら生きている。また、いわゆる「母語話者」と同じ言語能力を身につけることだけを理想とする教育実践への疑問や、複数言語能力にデコボコがあることを自然と見る捉え方も広く支持されるようになった。

では、これらの研究動向や成果を踏まえて、これらの「当事者の営み」のリアリティを私たちはどう捉え、どう理解したらよいのだろうか。親の視点、子どもの視点、教師の視点、社会の視点から、このテーマについて、多くの方々と共に考えるとともに、未来社会のあり様について共に考えていきたいと願い、今号の特集が企画された。

今号の特集には一般から多数の論考が投稿された。その論考は、本誌編集委員会で公正かつ厳正に審査された結果、「研究ノート」が1本、「エッセイ」が3本選ばれ、ラインアップが組まれた。以下に、それらの内容を簡潔に紹介しよう。

特集の最初の論考、小幡佳菜絵の「「移動する子ども」と展望的Family Language Policy——米日中をトランスナショナルに生きる女性の語りを事例に」は、日本人の両親のもと米国で生まれ幼少期より複数言語環境で育った上、日米間で様々な移動の経験を持つ女性が米国で出会った中国語を母語とする男性と出会い、現在は複数言語を使い中国で暮らす事例を検討した論考である。この女性の「移動する子ども」という経験と記憶が今後生まれる子どもの将来的な「家庭内言語政策・方針」にどのように影響しているのかを彼女の語りと思い添って考察した新しい研究である。

特集の3つのエッセイは、日本、アメリカ、オランダから投稿された。日本に暮らす北村名美の「複数言語・複文化環境で成長してきた「私」は、どのように複数言語と向き合い、生きよう

としているのか——幼少期から現在にかけて「ルーツ」への捉え方の変容を経験して」は、大学院で「多様なルーツを持つ子どもたち」への日本語教育実践を行なった後に、「日本と韓国のダブル」である自身の複数言語背景とルーツにどのように向き合ってきたのか、当事者としての思いや心の動きを自身の成長過程を振り返りながら記述している貴重なエッセイである。

アメリカの大学に勤める有留寛大の「母の日本」から「私の日本」への旅——辛かった補習校の後の大学生活」は、アメリカの大学で日本語を継承語として学ぶ一人の学生について書いたエッセイである。その学生はアメリカ人の父と日本人の母のもとアメリカで生まれ、子ども時代には英語で教育を受けながら週末に日本語補習授業校で学ぶ子どもだった。だが、その補習校での経験は辛い経験であったという。その経験と記憶を持つ子どもが大学生となり、日本語や日本とどう向き合っていたのか、また教師としてその学生をどう支えたのかが大学生活を振り返りながら詳しく述べられている。大学で日本語を学びながら変化する当事者の心情を理解し支えた示唆に富む実践の例である。

特集最後のエッセイは、オランダ在住の西山千香子の「継承語の支援とキャンプの可能性——欧州日本語親子キャンプへの参加を含め」である。オランダ人の夫と9歳、6歳の子どもと、オランダ語、英語、日本語の中で暮らす母が、子どもの日本語を含む複数言語習得の様子を詳しく述べたうえで、エッセイの後半で、スコットランドで経験した「欧州日本語親子キャンプ」の様子を記述している。子どもの言語習得の過程と日本語への思い、子どもの気持ちに寄り添いながら温かく子育てをする母の思いも丁寧に描かれている秀逸なエッセイである。

本特集の論考やエッセイが「移動する子ども」や「移動する家族」に関心を持つ方々や現在まさに複数言語環境で成長している子どもたちの「ことばの実践」に関わる方々の参考になれば幸いである。

(編集委員会委員長)